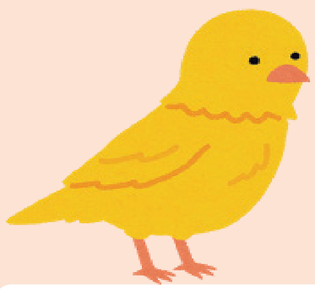
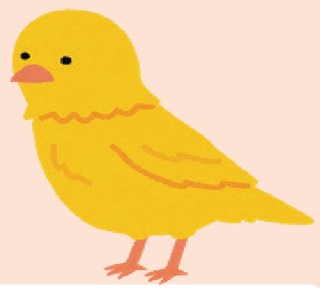
国立極地研究所
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
南極・北極科学館
Polar Science Museum



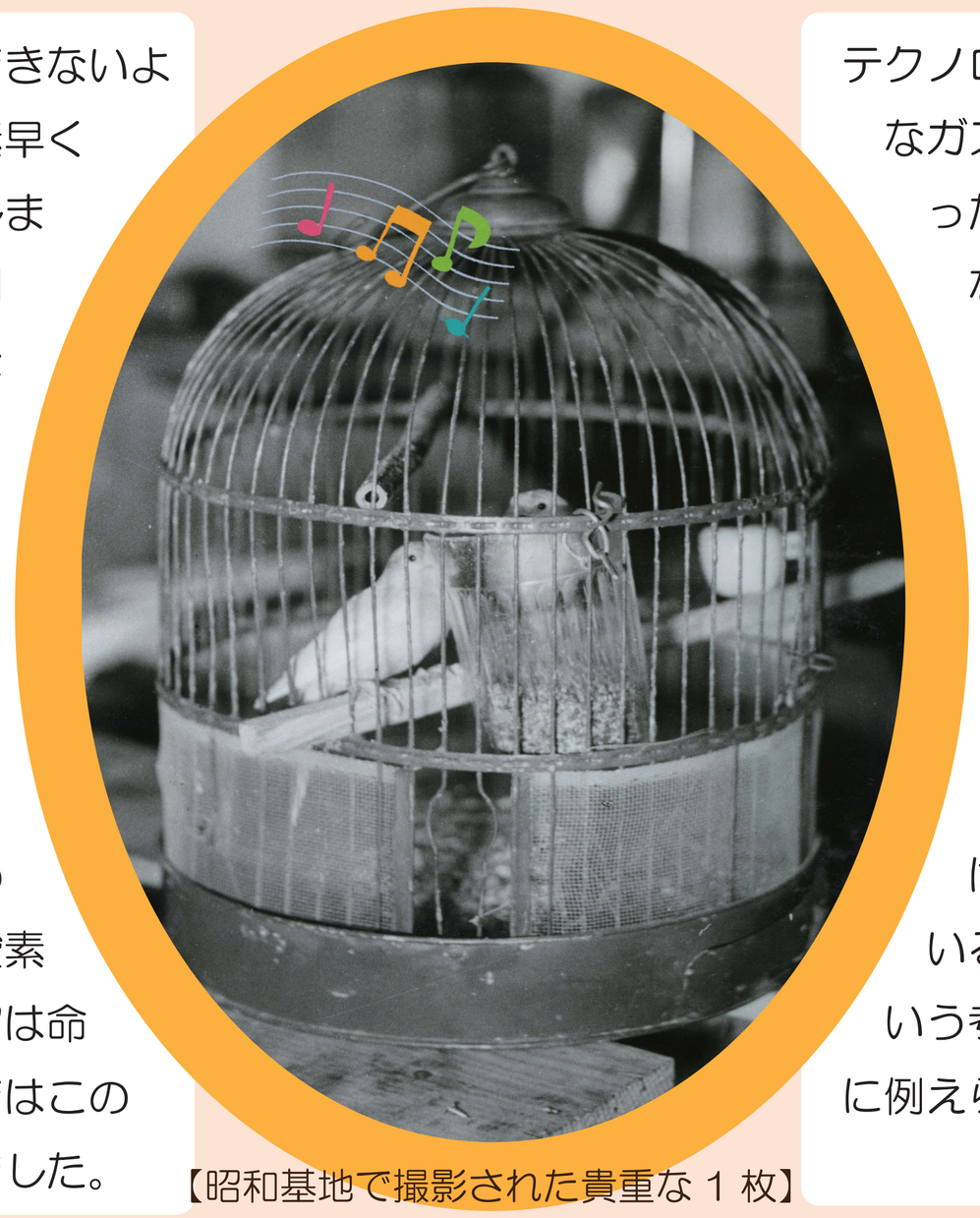
カナリア 昭和基地へ



1956 年、第 1 次南極観測隊と一緒に「宗谷」に乗って南極へ行った動物は、カラフト犬だけではありませんでした。西堀榮三郎副隊長兼越冬隊長がかわいがっていた 2 羽のカナリアが、タロ・ジロを含むカラフト犬 19 頭、オスの三毛猫のたけしとともに越冬したという事実は、あまり知られていません。

どうしてカナリアは南極へ行くことになったのでしょうか？

カナリアは、人間が感知できないような異臭や空気の異常にも素早く反応し、さえずりをやめてしまいます。昔は、その特性を利用して、炭鉱で酸素が薄くなったり、有毒ガスの発生を検知するために、先頭を行く人にカナリアの入った鳥かごを持たせていたそうです。一酸化炭素、メタン、窒素ガスなどで、人間が被害を受けることをさけるためです。有毒ガスを吸ったり酸素が欠乏することで、カナリアは命を落としてしまうので、今ではこのような利用はされなくなりました。



【昭和基地で撮影された貴重な 1 枚】

テクノロジーの進歩によって高性能なガス検知器が使われるようになったのも、カナリアが利用されなくなった理由の一つです。

昭和基地の建物は気密性が高く閉め切りになることが多いため、カナリアは空気のチェック係として南極へ行くことになったのです。

温暖化など環境変化の影響を受けやすい南極や北極は、地球全体に危険が迫っていることを知らせてくれる、という考えから「炭鉱のカナリア」に例えられることもあるそうです。

また、一緒に越冬した猫のたけしは卵が大好物で、カナリアの卵を食べてしまい、西堀越冬隊長に叱られたというエピソードも伝えられています。

1957 年 12 月、第 2 次南極観測隊を乗せた「宗谷」が南極付近に到着しました。しかし、例年まれにみる悪天候にみまわれ、昭和基地には到着できませんでした。1958 年 2 月 11 日、小型機 4 便に分かれて第 1 次越冬隊 11 名、カラフト犬 9 頭、そして、猫のたけしと共にカナリア 2 羽が「宗谷」に帰船しました。

無事日本に帰国したカナリアが、その後どんな余生を送ったのかは、残念ながら伝えられていません。

カナリアこぼれ話 －第 1 次越冬隊 11 人が昭和基地で越冬中の出来事－

1957 年 4 月 1 日　数日前から西堀越冬隊長がやっきになって何か探している。

西堀「カナリアのエサがもう 3、4 日分しかないが誰か知らんかいなあ」

隊員「この通路にあったのを見たんですがね」

西堀「確かに 1 年分のエサ箱があったんだが…」と不審そうである。

捜索願い第 1 号が出された。おらは知らん、ぼくも見かけないと騒ぎになり、エサがなければ早いとこ焼鳥にしたら？という陰謀も…。やがてエサは雪の中から無事に発掘され、ことなきを得た。

1958 年 2 月 11 日　小型機第 1 便で宗谷に帰船するのは子犬 1 匹とカナリア入り鳥かご 1 個。カナリアは 2 羽とも健在、焼鳥にもならず、凍えもせず、危うかりし 1 年、よくぞ過ごしたものと感心しながらこれを見送る。

～『南極越冬日記』（中野征紀著）より ～